

志都の石室

『万葉集』巻三には、石の宝殿に驚き、自分の氏姓生石村主真人の歌一首として、「大石」をわざわざ「生石」

大汝おほなむち 少彦名のすくなびこな いましけと表記して、この歌を作った

む 志都しつの石室いはやは 幾代いくよのではないでしょうか。

経ぬらむへ（三五五番）『播磨鑑』はりまがみにみえる「石宝

とみえています。大汝おほなむちは出雲殿略縁起」は、高御位たかみくら大明神

神話で有名な大國主命おおくにぬしのみことのことで、少彦名命とともに国土開

発にあたったとされます。こ神と号した少彦名命が五十余

の二神がいらつしやつた志都丈の岩を切りぬき、一夜の間

の石室はどれくらい昔のものに石の宝殿を作り鎮座したと

だろうと歌っているのです。伝えていきます。生石神社の祭

志都の石室については諸説神は今も大己貴命と少彦名命

ありますが、島根県大田市静の二神ですが、『万葉集』の志

間町の岩窟にあてる説や、高都の石室が石の宝殿のことと

砂市の石の宝殿とみる説が有すると、この巨石は奈良時代

力です。作者の生石真人は奈にはすでに信仰の対象となっ

良時代の官人で、通常は大石ていたことになりました。

真人と書かれます。天平十年（高砂市史編さん専門委員

（七三八）に美濃少目みののしょうさかんとみえ、西本 昌弘

天平勝宝二年（七五〇）に外

従五位下に昇進しました。こ

の歌の前後には「繩の浦」（相

生市那波か）や「武庫の浦」

が詠まれていますので、志都

の石室も播磨の名勝である可

能性が高いでしょう。生石真

人は岩盤から生え出たような



▲ 生石神社